

画中詞の中の「候べく候」

——その表現意図を考える

染谷裕子

一、はじめに

大英博物館蔵『猿の草子』^(注1)と天理図書館蔵『鼠の草子』^(注2)の二本には、絵の傍らに描かれた猿や鼠のセリフが付されている。いわゆる画中詞が存しているのである。そして、その画中詞の文末は補助動詞「候」で終わる場合がきわめて多いという共通点を持っている。一般に画中詞の文末は、表1に示すように、品詞別に見ると助詞止めが最も多い。が、『猿の草子』と『鼠の草子』(天理本)は文末全体の六〇七割が補助動詞であり、しかもそのほとんどが「候」である、という特異な状況を持つ。^(注3)このように「候」文末が異常に多い画中詞は管見ではこの二本のみである。

ところで、この文末「候」は他の画中詞にも見えるが、実はその上接語を見ると、表2に示すように、この二本の「候」文末に「べく候」が多く、さらに「候べく候」が目立つことがわかる。

この「べく候」は軍記物語などにも見えるが、「候べく候」は、文学作品ではめったに見えず、一般に文書類に多用される表現である。ところが、御伽草子の本文には、ある程度用例がある。

そこで、この「候べく候」の表現意図をさぐることに、二本の画中詞の性格の一端を明らかにするのではないかと考え、以下考察をしていく。

表 1. 画中詞の文末（品詞別統計）

作品	名	動	形	形動	副	感動	接続	助	助動	補動	その他	合計
50 岩屋（室町末江戸初期間）	0	1	2	0	1	5	0	38	13	22	1	83
100 雁の草子（慶長7年）	0	0	0	0	0	0	0	10	5	4	0	19
145 小男の草子（慶長12年）	0	0	0	0	0	5	0	28	8	11	1	53
198 十二類絵巻	0	13	4	1	4	1	0	69	66	21	3	182
231 是害房絵（室町初期）	0	0	1	0	1	1	0	24	15	15	1	58
268 中将姫（慶長前後）	0	0	0	0	0	0	0	10	2	10	1	23
285 てこくま物語（室町末期）	0	0	0	0	0	0	0	2	4	5	0	11
291 天神絵巻（室町末期）	2	4	0	1	1	0	0	27	6	10	0	51
293 天神本地（慶安元年刊本）	0	0	0	0	0	0	0	4	2	6	0	12
295 道成寺縁起（室町）	0	6	1	0	1	3	0	15	15	13	0	54
297 常磐の姥（室町末期）	0	2	0	0	0	0	0	32	3	0	3	40
306 鼠の草子（東博本）	2	3	1	0	0	0	0	42	18	14	0	80
309 橋姫物語（室町模写絵巻）	1	0	5	1	8	0	0	28	10	5	0	58
328 彦火々出見尊絵（江戸初期）	0	0	0	0	0	0	0	0	0	1	0	1
333 日高川（慶長頃）	0	0	0	1	0	0	0	11	5	14	1	32
340 福富草紙（室町）	1	30	16	2	4	3	0	79	77	19	4	235
341 福富物語（江戸初期）	1	0	0	0	0	0	0	3	1	0	0	5
348 藤袋の草子（麻生本）	0	12	6	3	7	2	0	61	36	19	2	148
349 藤袋の草子（若林本）	0	1	0	1	1	0	0	2	1	1	0	7
384 窓の教（江戸後期絵入写本）	0	5	3	0	1	4	0	57	30	20	8	128
391 虫妹背物語（享保2年）	2	8	3	0	1	2	0	52	11	2	1	82
402 弥兵衛鼠（寛文頃）	1	0	0	0	0	0	0	6	3	2	0	12
420 藍染川絵巻（室町後期）	0	1	0	0	0	0	0	16	3	12	0	32
426 あわびの大将（寛永～寛文頃）	2	9	3	0	0	3	0	38	13	8	2	78
453 新蔵人物語（室町）	1	14	23	1	2	4	0	72	32	13	2	164
460 稚児今参物語（室町後期）	1	3	8	0	7	2	0	147	68	86	4	326
468 天神本地（室町末絵巻）	0	1	0	0	0	0	0	3	5	9	7	25
猿の草子	0	0	1	4	1	0	0	17	16	72	0	111
鼠の草子（天理本）	0	5	2	2	0	0	0	15	6	73	0	103

上記の表は『室町時代物語大成』に掲載された画中詞から統計をとったものである。番号は作品番号を示す。

表2. 「候」の上接語

	岩	雁	小	十	是	中	て	天	神	道	鼠	橋	日	福	藤	窓	虫	弥	藍	あ	新	稚	本	猿	鼠	天
漢語+候	0	0	0	0	0	0	0	0	0	1	0	0	0	0	1	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	2
動詞+候	7	0	5	6	3	6	2	2	5	6	9	2	6	0	5	6	1	0	4	5	4	32	6	25	26	
形容詞+候	2	0	0	0	0	1	0	1	1	0	0	0	0	0	1	2	0	0	1	0	0	7	0	11	7	
形容動詞+候	0	0	0	0	0	1	0	0	0	0	0	0	0	0	0	1	0	0	0	0	0	0	0	0	0	
助動詞+候	3	1	1	2	5	1	1	2	0	1	1	0	0	0	2	4	0	2	4	0	1	3	2	21	26	
さうに候																									1	
ず候	2			1			1			1						2	2	1						3	1	
たく候					1																1			1		
に候(ごとくに候も含む)									1																3	
べく候	1	1	1	2	1		1											1				1		12	17	
候べく候	1	1																1				1		11	4	
まじく候					1										2	1		2				2		1	1	
候まじく候														2	1									1		
られ候						1									1									2	3	
れ候					1																		2	2		
助詞+候	2	2	3	5	2	1	1	3	0	3	2	1	6	2	3	4	0	0	3	1	2	29	0	14	8	
て候	2	2		4						2	1	1	1		1					1	1	19	3			
にて候			2	1	2	1	1	2	1	1	1	4	2	2	4			2				10		11	8	
合計	14	3	9	13	10	10	4	8	6	11	12	3	12	2	12	17	1	2	12	6	7	71	8	70	69	

対象とする作品は表1に同じであるが、作品番号297・341・349は「候」の使用が0または1なので表から省く。作品名は作品名中の一字によって示した。

二、画中詞と「候べく候」

まず、画中詞における「候べく候」を、『猿の草子』と『鼠の草子』以外の用例も含めてあげてみる。^(注4)

1、此馬は去年奥よりひき上せ候。しせん、令せつ候は、此馬に、のり候へく候。ひさうく。(猿の草子・室町末期絵巻)

比叡辻の左近衛助勝次のセリフで「もし、めでたい時がございましたならば、この馬にのりましょう」の意である。1と次の2は、馬自慢をしている場面である。

2、此馬は当年六歳にて候。一たんののり心申はかりなく候。犬かさかけの御さた候あひた、此馬にてつゝを仕候へく候。(同右)

栗林宮内左衛門尉実久のセリフで「犬追物と笠懸の御指示がございましたので、この馬に乗ってすべての矢を的中いたしましょう」の意。

3、二郎三郎にもたせ候、ほしくを、くれ候へく候。(同右)

御乳の人さま(女)の御輿からのことばで「二郎三郎にもたせています煎豆をくれなさい」の意味である。

4・5、はや日のくれて候。弥三郎殿、御まち候へく候。御心おもしろく候へく候。われくもあやかり候て、わかきいつくしきをむかへ取たく候。今道殿はいかおぼしめし候や。(同右)

高島甚九郎から今道の新太郎に向けたことばである。共に御輿の前を警護する猿で、徒歩で弓矢を持つ。「婿殿の弥三郎殿は姫君の御輿をお待ちでございます。その御心はなかなかのものでございましょう」の意。

6、そのことにて候。弥三郎殿、御ころのうちそゝろにうれしく候へし。めにて候ものは、とし事の外ふけ候まゝ、わか候はんするを、御なかうと候て、給候へく候。(同右)

今道の新太郎から高島甚九郎へのことばで「私の妻でございます者は、年とって格別ふけていますので、若くございませぬのを御仲人くださいますようお願いします。」の意。

7、□今、弥三郎殿、御前にて候。その□やうさうく御出し候へ。事の外□酔と見え候まゝ、からく□もる、つまりさかな、よく候へく候。(同右)

料理の指図をする猿のセリフ。男女の区別は不明である。

8、はや七こんまいり候。やかてく、其御さかな、御こしらへ候へく候。(同右)

料理の指図をする7とは別の猿のセリフ。

9、弥三郎殿さまは、かきくこんか、御すきにて候まゝ、よくくくこんをしめて、まいらせられ候へく候。(同右) 姫君の侍女から八王子又三郎へのことばである。

10、殿さま御ねぶりにて候。御ちや、さうくまいらせられ候へく候。(同右)

猿みつから茶人、千猿へのことば。

11、御連歌御ちやのこの用に、けさよりくりをむき候へは、おいとかやりくとして痛く候。番かわりに、むき候へく候。(同右)

栗の実をむく猿であるが、「おいど」は尻の女房語であることから、女猿か。「かわりばんこに皮をむきましようよ」という意。

12、れきくのまへにて、はぢかきたまふな。御たしなみ候へく候。(鼠草子・室町後期絵巻・天理本)

ひつさがしのすけ五郎のセリフで「お歴々の御前で恥をかきなさるな。御心がけなされ」の意。姫君の御輿入れを迎える準備をしている家来の一人で、ここでは御輿の受け取りの作法について確認している。出迎え四人のうち二人は人間の姿で描かれる。(注)

13、御せんのように、はや、よく御いり候へく候。てうしは、はやすぎ申候。(同右)

おちやう(女)から女たちへのセリフ。祝宴の御膳の用意をする女たちであり、絵では人の姿をしている。

14、いかに、ひめきみ、われらは、あるかたへ、ふるまひに、まいり候あひた、そのうち、このさうし御らん候て、御なぐさみ候へく候。(同右)

鼠権頭から姫君へのことばで、ここで権頭は人間の姿である。

15、さやうのことをこそ、かねてより申候へ。たゞいま、おほしめしやり候へく候。はや、かくれはあるましく候。
(同右)

くるみわりのひこ五郎のセリフで、姫君の乳母がしかけたわなにかかった権頭を助けにきてのことば。ここでは前の三例と異なり、鼠の姿をしている。

16、かたみの御ふみ、御らんして、よくく御あとを、ねんころに、御とひ候へく候。(藍染川・室町後期絵巻)
左近の主人である神主へのセリフ。

17、まことにこれまでの御いて、おそれいりまいらせ候に、ことのほかなくさみ候て、かやうの御事はしめにて御入候。又やかてまいり候て、みなみなへ、御れい申まいらせ候へく候。(岩屋・室町末期奈良絵本・スペンサー本)

姫君から中将の母・姉妹たちへのセリフ。恥をかかせるために招かれた姫君が、実はすばらしい才の持ち主であることがわかって母君・姉君たちは態度を改め、門口まで見送りにきた。そのことに對する姫君のことばである。なお、ほぼ同様な画中詞を持つ天理本では、この部分はない。

18、しゆくくわんの事も、はるかの中より、まうて候か、ほのかなる御おもかけに、あくかれて参て候。うちつけやうに候へとも、都のしるへと頼み候へく候。御下こうに御とも申候はん。(雁の草子・慶長七年絵巻)

雁の化身の男から女へのセリフ。石山観音で男が女に声をかける場面である。

19、をのつからなるやうに、いつへとさして、申候はねは、へたて候へく候とや、おほしめし候はんとよ。(同右)
雁の化身の男の女房に對することばで「ありのままにどこへ帰るとも申し上げませんので、あなたは私があなたをわけへだてしているのしょうと、思いなさっているのしょうよ」の意。

20、御ふみまいらせられ候て、たまはり候へく候。(小男の草子・室町末期絵巻・赤木文庫蔵)

小男のセリフで、女房への恋文を自分の主である周防殿に託している。なお、類似する画中詞を持つ「天理本」では「御ふみたしかにまいらせられ候て給候へかし」とある。

21、あさましき所にも、すてまるらせて候は、いかて御いのちも候へき。よくく、申候へく候。(稚児今物語・室町後期絵巻)

宰相の乳母から稚児・姫君へのことばである。行方不明と思われるいた姫君をこうして救ってくれたことに対して、くれぐれも御礼を申し上げるようという意。

22、かならず待まいらせ候へく候。(道成寺縁起・室町後期絵巻)

女から逃げようと「またくる」と嘘をついて行こうとする僧に対する、女の強いことば。この後、女は男を追いかけて、その妄念によって蛇と姿を変える。

問題の二本以外は、「候べく候」の用例がきわめて少ないが、これらの表現にはいくつかの共通点がある。まず、すべて文末の用法またはそれに準ずる用法で、文中に「候べく候」がくることはない。その意味で、一般の画
中詞に多い終助詞文末ときわめて近い。

用例16以降は、丁重ではあるが強い意志や依頼の感情が伴う特徴が見られるが、問題の二本の用例15までは敬意以外に特別な表現意識は感じられないものが多い。なお、二十二例中、明らかに女性の使用とわかる例は、七例見える。ところで、『七十一番職人歌合』の画中詞にも次の二例が見える。

23、なを米は候。けさの市には あひ候べく候

米売の女で、垂髪に桂巻、小袖を着用する。新大系注によれば、「豆売りとの対話と考えられ「まだ、米はありますよ。今朝の市には間に合っています（品切れにならない）」の意。

24、ちかきほどに、又芋舟とをり候べく候。いかほども召し候へ。

芋売の男で、束髪、小袖に袴を着用する。新大系注によれば、「近日中に、また舟が通りましょう。いかほどでもお買いください」の意。

また、『藤の衣絵巻』^(注6)の画中詞にも次の一例が見える。

25、かたしけなくみるいまよりはさいく／＼にほうこうもつかまつり候へく候（十八段絵）
 僧正の中納言へのことばで、自分と中納言が兄弟であることがわかり今後の気持ちを述べたことばである。
 これらの例から考えても、「画中詞」と「候べく候」は何らかの関連があるのである。

三、お伽草子本文の「候べく候」

実は、お伽草子においては、画中詞だけでなく、その本文にも若干の「候べく候」が見られる。『室町時代物語大成』（十三巻・角川書店）の四一八作品の中で、一二作品一七例が見える。このうち、六例が会話文、七例が書状、一例が地の文、三例が奥書に見える。

(1) 会話文の場合

26、こしはいたく候へとも、それへまいり、よくく、うけたまはり候へく候（うらしま・室町中末期絵巻）
 姥ごぜの浦島太郎に対することばである。

27、これを見きかぬ人は、返々も、くはんおんを、しんかう申候へく候（熊野の本地・室町末期絵巻・杭全神社蔵本）
 妃の武士たちに対することばである。杭全本は伝本の多数存在する当作品の中で特色のある本である。一箇所だけ画中詞が存するが、歌のみでセリフはない。

28、我も、三さいまで、ちふさを、まいらせ、そたて申候へく候と、御ゆいこん、さまく、おほせありし御事なり（同右）

前例に同じく、後の仏神に対することばである。

29、又、ものゝふ、かへるとて、此やまにて申けるは、大わうのわうしにて、ましますなり、ちくるいつはさに、いたるまで、かまへて、あやまち申へからず、よくくつきそい、そたて申候へく候との、せんしなりとよははりければ（同右）

王子を置いて帰る武士たちの畜類・鳥に對することばである。

30、我らも、心なき物なれ共、むかしかいまにいたるまで、せんしを、そむき申へきにも、はんへらす、しかれば、はんにまいりて、御とのる申候へく候とて、みねにのほり、このみをひろい、たにくたりて、みつをむすひて、わうしを、そたてまいらせんと、御やくそく、申けるほとに（同右）

前例に答える虎・狼の決意のことばである。

31、サレハ、今度ニヲキテハ、他州ニテ、カハネヲ、捨候へく候（是害房絵・文和三年写本）
是害房の聞是房に對する決意を述べたことばである。

(2)書状の場合

32、あはれと、おほしめし候へく候。かしく（しのばすが池物語・寛文八年刊本）※右衛門↓はちすの前

33、人をはしめて、おほしめし候はんには、けに、うつなき御事にて候へく候（はにふの物語・明応六年写本の転写）
※姫君↓白河あたりの人

34、たうと、てんぢく、わかてうに、いきとしいけるものもかそへは、かきり御いり候へく候へとも、そもしさま御ゆもしさ、さらにさらに、かきりあるましく候（ふくろうのそうし・明曆四年写本）※ふくろふ↓うそ姫

35、なかなかことも、いわしろの、まつのことのはに、かきくらしまいらせ候まま、なくなのこしまいらせ候事、ふひんと、おほしめしやりたまひ候へく候、かしこ（同右）※ふくろふ↓うそ姫

36、この世にてこそ、つたなく候とも、のちの世は、おなしはちすにむまれ、おもふことなく、そひまいらせ候へく候（花みつ月みつ・江戸中期写本）※花みつ↓たゆう・ししう（乳母）

37、さかさまなる、御とふらひに、あつかり候は、ありかたく候へく候（同右）※花みつ↓父
38、御返事給はらは、御嬉しく候へく候（山海相生物語・土佐光起画絵巻）※山の神↓おこせ

(3) 地の文の場合

39、いつれも、御とふらい、ことくく、うけ申へし、心さしをもつて、一へんなりとも、とい給ひ候へは、お、とつき候なりと、おほせ候へく候(長宝寺よみかへりの草紙・永正頃写本)

地獄から甦った人の告白という設定の作品。その意味で、会話文に準ずるとみてよいが、他作品でも「べく候」などは、読者へのことばの中によく見える。

文学作品ではないが、有職故実書の『宗五大草紙』(大永八年)に次の一例が見えるので参考までにあげる。

40、三職ハたがひに進之候と在之。又人の御心により候て進覧共あそばし候か。おなじ御家ながら職御持候はぬ前には。人々御中共調られ候歟。其外の國持衆。御共衆申次以下へハ。打付書にて。公家へは御家により替りめ候べく候。(群書類従22・六百頁上)

(4) 奥書の場合

41、此そうし、正ほんのことく、書申候、らくぢ、わけ見えぬ、ところはしは、すいりうに、御よみ候可候(いけにえ物語・江戸期写本)

42、落ち候へく候(雁の草子・慶長七年絵巻)

前の部分が欠けていてわかりにくいだが、書写の際脱字等があるうという意である。(注7)

43、本のことく、かきうつし候、やかて、かた見になり候へく候(秋月物語・寛永十八年写本奥書)
筆者「とうあん」が娘「よま」にあてたとある。

以上の用例の中で、特に「会話文」の用例に注意しておきたい。『うらしま』のこの部分は地の文がなく、会話文だけで物語が進行していて、画中詞のセリフにきわめて類似する。また、『熊野の本地』(杭全本)は、絵巻であるが一図のみ画中詞を持つ(ただし、歌のみ)。そして、先の四例は比較的集中して用いられており、このあたりは絵が多い。さらに『是書房絵』は画中詞を有するが、その画中詞のすぐ近くに、この用例がある。すなわち、「会話文」の用例すべてが画

中詞との関連を想像させる。この点から考えても、「画中詞は「候べく候」と何らかの関連があると考えられる。

四、他の文学作品の「候べく候」

他の文学作品における「候べく候」の使用状況を見ると、この表現はめったに見いだせないことがわかる。「候べく候」の用例のある作品を表3に示した。なお、参考までに「べく候」の用例のあるものも示したが、「とはずがたり」は「べく候」の用例は「候べく候」のみであり、必ずしも「べく候」の用例が多い作品に「候べく候」があるわけではない。以下に、「候べく候」の用例をあげてみるが、『渋川版御伽草子』の用例（文書中の用例）は省略する。

44、「汝婦ナバ、紫野ニ参テ申ベキ事ハヨナ、『……若尚シモ康頼ヲ恋シト思食レム時ハ、一年書注シテ進セ候シ、往生ノ私記ヲ御覽候べく候』ト、能々心得テ申ベシ」トテ、袖モシボル計也（『延慶本平家物語』第一末）

成親が息子基康に成親の老母に伝言を頼んでいる場面。なお、この記事は増補系諸本のうち『長門本』（岡山大学蔵本）・『源平盛衰記』（慶長古活字本）にはない。語り系諸本のうち、屋代本・百二十句本・覚一本（高野本）にもない。

45、「御舍利ヲモマガマセ進ラセ候べく候ヘドモ、同事ニテ候ヘバ、是ヨリ高野山ニ上テ、奥院ニ納メ奉リ候ベシ」ト申テ、ヤガテ高野へ上テ、御廟ノ御前ニ納テケリ。（同右・第二本）

有王丸の主人（俊寛）の姫君に對することばである。なお、この部分は増補系諸本のうち『長門本』・『源平盛衰記』にあるが文脈が異なり該当する部分はない。語り系諸本も同様である。

46、「不肖ノ身ニテ御返報ニ及候条、其恐少ラズ候ヘドモ、此ハ上ニ御アヤマリナキ事ヲ、アシザマニ申人ノ候ヒケルヲ陳ジ開テ、御鬱念ヲ謝シ候べく候」（同右・第二本）

静憲法印の入道に對することばで、丁寧だが、かなりきびしい口調である。なお、この部分は『源平盛衰記』「不肖ノ身ヲ以テ御返報ニ及条、其恐不少トイヘドモ、且ハ仙洞ニ御過ナキヲ、人ノ悪様ニ申入ケル事ヲ陳開テ、御鬱念ヲ謝シ申ベシ」とあり「候べく候」はない。長門本や語り系諸本には該当する部分はない。

47、「……いふかひなき北面の下らうふぜいの物などに、一ふるまひなどはし候などいふ事の候やらん。さやうに候

表3

作品	ジャンル	候べく候	べく候	備考
狭衣物語	物語		1	山伏のことば
宇治拾遺物語	説話		5	
十訓抄	説話		2	
沙石集	説話		7	
とはずがたり	日記	2	2	
徒然草	随筆		1	
保元物語	軍記物語		7	
平治物語	軍記物語		5	
平家物語 (延慶本)	軍記物語	3	70	
平家物語 (覚一本)	軍記物語		50	
曾我物語	軍記物語		4	
太平記 (土井本)	軍記物語		34	
おきく物語	軍記物語		3	
謡曲百番	能台本		6	
舞の本	幸若台本		17	
虎明本狂言集	狂言台本		4	註の文
御伽草子 (波川版)	御伽草子	1	5	
浮世床	滑稽本		1	口上

「べく候」には「べう候」や「べくも候」等助詞が入るものも含めている。但し、「候べく候」はこの形しかない。

はゞ、こまかにうけ給候て、はからひさたし候べく候」(『とはずがたり』卷一)

院の東二条院への御返事で、直接は使者に言い渡される。なお、この部分は、相手の不満のことばに対するかなりきびしい口調である。なお、テキストは江戸初期写本である。

48、「……雅忠などや候はゞ、ふびむのあまりにもあがひ申候はん。我身にはふびむにも候はねば、ふけうせよの御気色ばし候はゞ、おほせにしたがひ候べく候」よしを申さる。この御ふみをもちてまいりて、御前にてひろうするに……(同卷二)

久我の尼上の院に対する御返事で、本文から「ふみ」であることがわかる。なお、ここの前例と同じく、院に対するきびしい口調である。

以上の例のうち、例45と例46は直接相手に向けたことばであるが、44と47は使者を通してのことばである。従って、例44と例47は例48の手紙文に準ずるとして考えてよからう。なお、45以外はお伽草子の一部の用例に見られるような表現意図(丁重ではあるが強い意志や依頼の感情が伴う特徴)が感じられる。すなわち、丁重な依頼や丁重ゆえの相手に対する厳しい態度が表れている。

五、文書と「候べく候」

文学作品にはほとんど見えない「候べく候」は、文書類にしばしば見られる。『平安遺文』全文と『鎌倉遺文』『南北朝遺文』、『実隆公記』紙背文書の一部に見られる「候べく候」の出現数を表4に示す。『鎌倉遺文』については、一二〇〇年頃の約十年分の文書(鎌倉遺文A)、一二五〇年頃の約十年分の文書(鎌倉遺文B)、一三〇〇年頃の約十年分の文書(鎌倉遺文C)、『南北朝遺文』については一四〇〇年頃の約十年分の文書、『実隆公記』については一五〇〇年頃約十年分の文書をサンプリングした。

文書の種類も異なるため、断定的なことは言えないが、平安末頃から若干見える「候べく候」が、鎌倉時代になって多用されるようになり、室町時代に至ってはかなり頻用されるに至ると言ってもよからう。平安時代は仮名文書にのみ見

表 4. 古文書と「候べく候」

	文書数	割合	用例数	一通あたり	備考
平安遺文	8	0.15%	11	1.38	天応元年(781)～元暦元年(1184)の5343通
鎌倉遺文A	4	0.65%	5	1.25	建久元年(1190)～建久十年(1199)の612通
鎌倉遺文B	28	2.75%	38	1.36	建長元年(1249)～康元二年(1257)の1017通
鎌倉遺文C	97	3.59%	144	1.48	正安元年(1299)～嘉元四年(1306)の2702通
南北朝遺文	19	2.14%	39	2.05	暦応四年(1341)～観応元年(1350)の888通
実隆公記	257	32.25%	460	1.8	延徳元年(1489)～明応八年(1499)の紙背文書797通

割合は、全文書数に対する「候べく候」の見える文書の割合を意味する。

えるが、鎌倉中期の資料では例54のような変体漢文の文書にも見られるようになり、この表現の広がりがある。また、本来は「讓状」のような文書で最終文に見え、丁重であるが、強い依頼や強い意志を表現していたものが、多用されるに至り、一方でその意味を持ちながらも単なる丁寧表現にすぎない例も見られるようになっていく。いくつか用例を示す。

50、やましろのくに、かみかつらのしやうもいふと事、たまためのりみつかよせふみ、いけのもんそくして、おほやなきとのゝひめゆやの御所へなかくゆつりまいらせ候ぬ、ともかくも御心にまかせられ候へく候（長久四年〈1043〉正月十日・「大納言房讓状案」東寺百合文書『平安遺文』603）

51、ゆつるためのかうくの事、をん那つ加、をしきり・せらた・かみひらつか・見つき・しもひらつか・こせんのかかなり、たのさまたけあるへからす。このむねお承候へく候、ハ、百さうさたのそのあてとすへし、たしかに／＼ゆつりおハぬ（仁安三年〈1168〉六月廿日・「源義重讓状」正文書『平安遺文』3466）

52、御文くハしくうけ給ハリ候ぬ、る中もかたの御事おほつかなく思申候、さてさぬき房くたりの事、をりふしからのまつりのたしにて、□□月の十五日のこのひにて候、いますこしのへられ候て、むかへにも給ハリ候はゝやと申候、さもおほしめされ給ハ、やわたへらい月の十七日につき候やうにむかい御やり候へく候、何事もさぬき房ニおほせ入られ候へく候、あなかしこ（建久十年〈1199〉正月「源頼朝書状寫」平松文書『鎌倉遺文』1034）

53、つりかね十八、さうかね十、おゝかなもの十五、こかなもの二十、なお、こかなもの四つ、かけかね二十かけ、さうしやとりかけかね十かけ、いまこれ二候小中のかなもの五十四、やりとのかけかね十候也、候へく候也、やかていそき／＼のほり候へく候也（建長三年〈1251〉二月「金物送文」下総中山法華経寺所藏秘書三裏文書『鎌倉遺文』7285）

54、於内宮法樂會、卒爾見參、心事相殘候了、伊賀神戸預所事、近日有其闕之由承候、令所望給候へく候、在来之便宜大切事候、兼又繪所事御沙汰共候て、令來臨給候へく候（乾元二年〈1303〉閏四月「某書状」輯古帖御裳灌和歌集裏文書『鎌倉遺文』21505）

55、右、くたんの地ハ、やうようあるによて、ようとう壹貫文に、さつま殿に、うりたてまつるところしち也、きやうこうさらにたのさまたけあるへからす候、もしのちにさまたけをもちし、しさいを申候事候ハ、ぬすひとのさいくわにをこなハれ候へく候、なをくしさい候事候ハ、あいともにさたし候へく候、なを又わつらい候物ならハ、ちきせんを、壹はいのさたとして、かへしたてまつり候へく候（嘉元四年〔1306〕三月卅日「尼御前屋地賣券」九条家文書『鎌倉遺文』22593）

56、ちんせいほうきによて、ハつかうする所なり、すてにひせんの國三いしまてつきて候なり、いそきく、一そくをもよをしてまいられ候へく候、猶々とくしてまいられ候へく候（観応元年〔1350〕十一月十八日「足利尊氏御内書」長府毛利家所蔵文書『南北朝遺文』1897）

57、申度事者海山うかひ出候へとも中々にてとめまいらせ候、千言万言不如一黙にて候、御推察候へく候（延徳元年〔1489〕十二月紙背文書・姉小路基綱書状）

58、いまかやうにおほせられ候おりふし、御しこう候ましきよし申され候、御ほいなく候、御さうはく候はすは、五てうにとくしこう候と、人をつかはされ候ておほせられ候へく候、まつく御ちひやう御心もとなくおほしめし候よし申とて候、わたくしも御心もとなく候、御やうしやう候て、とく御まいり候へく候（実隆公記）延徳三年〔1491〕四月紙背文書・女房奉書）

59、けふ御所さまならせおハしまし候御事にて候、めてたく御しこう候ハ、御うれしくおほしめし候へく候よし、よく申とて候、猶々いかやうにも御まいり候へかし、あまりニすやかなる御事にて候ほとに、御しこう候て、御一もまいらせられ候やうニと、思ひまいらせ候、返々御まいり候へく候、かしこ（『実隆公記』明応三年〔1493〕二月紙背文書・勾当内侍消息）

60、三てうの中納言けさしこう候ハんする、そのとき御まいり候へく候、御たんかう候ておほせられ候へく候よし申とて候、かしこ（『実隆公記』明応六年〔1496〕九月紙背文書・女房奉書）

六、結論

すなわち、「候べく候」は、文書のことばであり、文学作品等においては文書またはそれに近いものに、その例を見ることはあっても、会話文にはめったに出てこない表現なのである。そのめったに出てこない表現が、なぜ画中詞に見えるのか。確かに、問題の二本の絵巻以外は若干例しか見いだせない。が、先に述べたようにお伽草子以外の画中詞や、画中詞と関わりがありそうなお伽草子の会話文にも例が見える。やはり、「候べく候」は画中詞と何らかの関連を思わせる。お伽草子と非常に近い関係にある軍記物語や謡曲、幸若などにまったく見えないに等しいことを考えると、これらの例は何らかの意味があるのではないか。

ここで改めて「画中詞」の意味を考えてみたい。絵巻は、物語本文・絵・画中詞から成り立っていることはいうまでもないが、ともすると、同じ言語表現であるということから、本文との関係のみで画中詞をとらえがちである。その結果、両者に隔たりがある場合、本文は伝統的な文語、画中詞は当代的な口語というとらえ方をしたくなる。しかし、そういう面をすべて否定するわけではないが、画中詞は当代的な口語そのままでは決してなく、文語的な表現も多々見られるのが事実である。

今、視点を変えて、画中詞の絵に対する役割について考えてみる。人物の絵にセリフをつけるということはどういうことか（逆に画中詞が先でそれに絵を描くということも考えられようが、今ここではその場合は考えないことにする）。それは、一つに人物に感情を吹き込むことであろう。それが、表現で言えば、終助詞やある種の感動詞であろう。画中詞に助詞止めが多いことはこの点と関わる。そして、もう一つには、ことばが相手に向けて発せられる「対話性」を言語によって持たせることではないか。それが、待遇表現であろうかと思われる。ただし、絵が存する以上、人物の服装等から身分は想定できるだろうから、それほど厳密な待遇表現は必要としない。（位相があまり見えない点も実は、この絵のせいといえるかもしれない。）

ところで、橘豊氏は、書簡の特質として「文書性」と「対話性」をあげる。^(注8)すなわち、書簡は文字言語ではあるが、

常に相手があるのであり、話しことばと類似する面も合わせもっている。そして、書簡における待遇表現はこの「対話性」が必然的に招きよせたものであると指摘する。

従って、同じく「対話性」を要求される画中詞において、一般の書簡体でよく用いられる語が使用されるとしても何ら問題もないのである。画中詞を当代の「話しことば」にしなければならぬ理由はないのである。

さて、次に問題となるのは、なぜ『猿の草子』と『鼠の草子』（天理本）に「候べく候」が目立つのかという点である。五で述べたように「候べく候」は、室町時代に至りかなり頻用されている。表4に示した『実隆公記』紙背文書で「候べく候」の見える書状二五七のうち約半数（二二六文書）で、二例以上の用例が見え、多いものは五〜六例も見える。また、これらの用法は丁重な表現ではあるものの、本来持っていた特別なニュアンスを失っている。この実態はまさしく『猿の草子』や『鼠の草子』（天理本）の「候べく候」の用法の実態と重なるのである。従って、この二本の画中詞では当時の手紙文における「候べく候」の流行を画中詞に反映させたのではないかと考える。

『実隆公記』紙背文書には多くの女房奉書や女房消息が見られるが、これらには特に「候べく候」が頻用され、江戸時代以降この「候べく候」が女消息の専門用語になっていく過程をうかがわせる。『猿の草子』の画中詞の用例3と11は、共に女性の使用であるが、それぞれ女房詞（「ほしほし」「おいど」と共に「候べく候」が用いられているが、この女房詞も女房消息とは関連が深いものである。これらなどは、当時の実態を反映した好例とみてよいのではないだろうか。^(注9)

注

(注1) 『在外奈良絵本』（奈良絵本国際研究会編・昭56・角川書店）に全文の影印が、『室町物語 上』（新古典文学大系・岩波書店）に翻刻が掲載されている。

(注2) 『古奈良絵本集（一）』（天理大学出版部・昭47・八木書店）に全文の影印が、『室町時代物語大成十』（角川書店）に翻刻が掲載されている。

(注3) 「画中詞の文体——文末から考える」（平成十二年度日本大学国文学会口頭発表）による。

- (注4) 用例16～25は『室町時代物語大成』の翻刻による。以後、特にことわりがない限り、『大成』による。なお、「候べく候」と「まいらせ候」は草体の連綿で綴るとたいへん似ていて、中には区別がたいものもある。しかも、文脈の上でもどちらとも判断しがたい。たとえば、『雁の草子』は、『大成』では「候べく候」と翻刻し、『新大系』では「まいらせ候」と翻刻する場面がある。草体に区別がつけにくく、しかも文脈の上で支障がなければできるだけ「候べく候」と今は解しておく。
- (注5) 『鼠の草子』は東京博物館蔵本ではすべて鼠は鼠の姿のまま描かれるが、ここでとりあげている天理本では、人間の姫君の前では鼠は人間の姿で描かれている。そして、この人間の姿に化けている時に「候べく候」が使われることが多い。
- (注6) 伊東祐子『藤の衣物語絵巻(遊女物語絵巻)』・平8・笠間書院
- (注7) この部分絵に接しているので、直前の歌「よの中にかゝれとてこそむまれけめことはりしらぬわか泪かな」のあとの画中詞としても考えられるが、藤井乙男博士は「それにては行間の隔たり多きにすぐれば」として、後の奥書の解釈の一部と解する。(昭15・京都帝国大学複製本)
- (注8) 『書簡作法の研究』昭52・風間書房
- (注9) 用例11の話者は下仕えの女猿ゆえ、あえて女房消息の語を使わせる滑稽性がねらいかもしれない。